この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社
神吉晴夫

長編推理小説 無効試合

昭和37年9月10日 初版発行

¥ 220

著者 佐野洋（さの よう）
東京都大田区市野倉町227

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 〔明泉堂製本〕
表紙の模様・意匠登録 116613
© Yô Sano 1962

無効試合

佐野（さの）　洋（よう）

カッパ・ノベルス

スコア（目次）

1回表 1 …… 五
1回裏 0 …… 三一
2回表 2 …… 五八
2回裏 0 …… 八一
3回表 0 …… 一〇六
3回裏 0 …… 一三二
4回表 0 …… 一五八
4回裏 2 …… 一八三
5回表 0 …… 二一二
5回裏 0＋x …… 二三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

さしえ・吉原澄悦

1回表　1

1

乙羽市。小説の舞台となる都市に、この耳なれない名をつけたことを、お許しいただきたい。しかし、作者は架空の物語であるがゆえに、架空の都市を舞台に選んだというわけではない。もとより、現実の都市名を出すこともできたのだが、そうすることによって、おそらく生ずるであろう、種々の誤解を避けたいと思ったからなのだ。

一九五五年の国勢調査によると、同市の人口は十五万六千二百人であるが、その後、隣接町村を合併しているから、現在は二十万人には達しているだろう。一八八〇年代に市制が布かれ、戦前までは、県内唯一の市であった。県庁もここにある。乙羽盆地のほぼ中央に位し、織田、豊臣時代から、城下町として発達した。市内の町名が、なんとなく古くさいのは、その当時の名残りであろう。

×　×　×

七月二十二日、午後二時に水銀柱は三〇・八度を示した。じっとしていても、汗がにじみ出てく

る。ほとんど無風状態であるため、温度に比較して、湿度が高すぎるのだ。典型的な盆地型の夏であった。

だから、街には、怠惰な気分がみなぎっていた。市内の主要交通機関であるバスのエンジンは、暑さにあえいでいるようだったし、『暑気払いに大売出し』と書かれた商店街ののぼりさえ、ぐったりとしぼんで、暑気を払うどころか、暑さに参っていた。

そして、その現象は中央日報乙羽支局二階の編集室にも例外なく現われていた。五十近い支局長は、ランニング・シャツにステテコという姿で、デスクの上に両脚を上げ、眠そうな表情で、本社からの通達文を読んでいた。ほかには、次席が一人と、電話番の若い記者がいるだけだった。残りの支局員たちは、それぞれ、取材先に出払っていた。と言って、その記者たちが勤勉だというのは当たらないようだ。別に用はなくとも、支局にいては居眠りもできないから、記者クラブのソファーに寝ころがるか、冷房のある喫茶店で、ぼんやりと音楽でも聞く気で、外へ出かけたのだろう。

木造二階建ての支局の窓は、全部あけ放たれている。そうしておけば、風がはいらないでもないという、はかない期待のあらわれであった。だが、風らしい風はここには来なかった。表通りの自動車のクラクションや、広告放送塔からのけたたましい呼びかけが、たえまなく流れこんでくるだけに、かえって、暑苦しい感じさえする……。

「じっさい……」と、支局長の臼田が、舌打ちとともに言った。読み終わった本社からの通達を、次席の杉崎に投げて渡す。「本社じゃあ、よほど暇なんだな。次から次へと、新しいことを考えて、

よこす」

「まあ、本社には冷房がはいっていますからね。涼しいところで仕事をしていれば、少しは頭の働きも活発になるでしょうよ。しかし、その分が、支局いじめになって現われるのでは、かないませんな」

杉崎は、臼田に向かって追従笑いをしながら、眼の前の書類を開いた。

昭三十×・編達・第一五

編集局次長
地方部長
運動部長

支社報道部長
各支局長
各通信部殿

高校野球選手をめぐる職業野球団の動きについて

酷暑のところ、連日のご活躍、ご苦労さまです。

さて、今般、表記の件につき、特集することになりました。近時、プロ野球団のスカウト合戦

は、ますます激しくなり、これは契約金の上昇という形で現われてきています。この現象は国会でも問題となり、いまや、大きな社会的関心を呼んでいると言えましょう。

一方、高校野球は、現在、全国大会のための予選を各地で開いておりますが、その有力選手に対して、プロ野球団スカウトの手が伸びていることは、とうぜん考えられます。その是非は、しばらくおき、現象をニュースとして取り上げるのが、本特集のねらいです。

左記要領で取材のうえ、八月十日本社地方部デスク必着でご提稿ください。

一、プロ入りを伝えられている有力選手の名前。（紙面では、仮名あるいは記号を使うことになるかもしれません）

二、それらの選手たちは、具体的にプロ入りを勧誘されているのかどうか？　もし、勧誘されているとすれば、球団はどのような線を通じてそれをしたか？

三、選手の意志を左右できるような実力者に対する球団の工作ぶり。

四、プロ入り確実の選手と、他の選手との心理的ギャップ、また、彼らの、教師や同級生に対する態度はどうか？

五、逆に、選手側からプロ球団に対して売りこみを策している形跡はないか？　その場合、選手の背後事情。

六、その他、この問題について話題になるようなこと。

以　上

なお、本特集は、特集面デスクにおいて、適宜編集いたしますから、常識的には記事にはでき

ないと思われるようなことでも、一応、ご提稿ください。噂程度のものでも結構です。（その際は、項目の末尾に、そのことをお書き添え願います）

「なるほど……」

杉崎は、読み終わって、煙草に火をつけた。「本社じゃあ、そろそろ交代で夏休みをとる時期が来たんですな。そこで、人手がたりない分を、支局におぶさるつもりなんでしょう。増ページして、特集面がふえればふえるほど、末端にしわよせが来るわけですよ」

「ああ、しかし、こうやって手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

配が来た以上、いちおう、調べてみなけりゃあならんな。高校野球を担当しているのは、だれだったかな？」

支局長の臼田は、いつまでも、杉崎の愚痴につきあってはいなかった。それは当然であろう。本社の悪口は言うが、もっとも本社の顔色を気にしているのは、彼なのかもしれないのだから。

「向川君です。いま、県営球場に行っていますから、ついでのとき、これを届けておきましょう」

杉崎は、『本社手配控簿』を出して、

『七・二二　プロ野球スカウト（特集面デスク）八・一〇まで、担当向川』と記入した。

県営球場は、市の西はずれにあった。すぐそばを、時川という幅十メートルぐらいの川が流れている。町村合併が行なわれるまでは、この川が市と郡との境になっていたのだ。雨季には、水量がまし、ときには堤防をこえることがあった。そうなると、球場のあたりいったいは水浸しになる。球場のグラウンドがでこぼこだと言われている原因は、こんなところにあるのかもしれない。

球場は、ほぼ真四角という、変わった形を持っていた。地方球場としても、三流クラスではないだろうか？　もっとも、乙羽市には、市の北部に、もう一つ県営の球場がある。何年か前に、国体を誘致するために作った球場であった。しかし、ここは、よほど重要な試合でないと、開放しないのである。高校野球の場合は、県予選準々決勝以上となっていた。そちらの方は、県営北球場、そして時川に近い方は、西球場と呼ばれている。

西球場では、高校野球県予選の二回戦が行なわれていた。

この県予選は、県下二十三高校が参加して、十八日から戦われている。この日は、二回戦の最終日であった。予選の形式は、他県と同じく、トーナメントである。

このトーナメントで勝ち抜いた二校が、県代表となって、隣県(りんけん)代表の二校と地区大会で顔を合わ

せ、地区大会の優勝校が、甲子園の全国大会に出場する資格を持つのである。
県営西球場のネット裏で取材していた、中央日報乙羽支局員、向川重雄が『向川どの』と表に書かれた封筒を、支局からの使いから受け取ったのは、啓養高—県立農林高戦の最終回であった。
「なんだろう？　急ぐのかしら？」と、向川は使いの少年に聞いた。
「いいえ、そうではないようです」
使いの少年は、答えながらも、眼は試合に向けていた。「向川さん、やはり、啓養が勝ってますね」
県大会前の予想では、啓養は優勝候補に上げられていた。『ことしこそ、県代表が甲子園に……』と、地元の山増新聞は書いていた。
『ことしこそ』と断わったのは、ここ三年来、県の代表は、すべて隣県との地区大会で敗退し、全国大会には出場していなかったからだ。しかし、もし、番狂わせがなければ、啓養高が勝ち進み、そうなれば、地区大会でも優勝できるのではないかというのが、いわば地元の悲願だった。
「うん。桐元というのは、なかなかいいよ」
向川も、球場に眼を移した。
グラウンドでは、その桐元が、マウンドに立っていた。九回の表、県立農林高の攻撃である。スコアは、3—0で啓養高のリード、そして、農林高最後の攻撃も、すでに二死になっていた。
桐元は、キャッチャーのサインにうなずいた。野球の選手に似合わず、顔色は白かった。日に焼

けないたちなのだろう。
モーションを起こした。彼はサウス・ポーであった。右足のあげかたが、華麗である。まっこうから振りおろす桐元の左手から、白いボールが流れた。
ホームにかぶさるようにして構えた、農林高の打者が、短めに持ったバットを振った。球とバットが鈍い音を立てた。球勢に押されたボールは、一塁右の小さなファウル・フライとなった。一塁手が手を上げた。ボールがそのファースト・ミットに吸いこまれる。
審判の右手が上がった。試合終了である。
向川は、すでに書き上げていた、試合経過をまぜた戦評を、そのまま、使いの少年に渡した。彼はその記事の中に、この日の桐元を超高校級のスピードを持つと書いておいた。被安打三、四球一、奪三振十二という成績からも、この試合の殊勲者は、桐元と言ってよいだろう。彼は、こんご、桐元の投球を見るのが楽しみだと思った。
向川は、使いの少年が持って来た封筒を開いてみた。本社からの手配である。読みながら、彼は桐元のことを頭に浮かべていた。いままで、予選の一、二回戦を見てきた限りでは、桐元ほどの選手はいないようだった。
もし、県下で、ことしプロ入りする選手がいるとすれば、桐元であろう。あるいは桐元だけかもしれないと思った。
向川は、本社からの手配書をポケットにおさめ、なにげないふうに、隣席の東都新聞記者、梶岡

に聞いた。
「桐元なら、プロ入りできるだろうな」
「ああ、おれたち、素人目にはそう見えるな。あれで、いいコーチがつけば、稲尾級になるかもしれないぜ」
「どこかから、口がかかっているという話を聞いていないか？」
「いや。まだ県予選の段階だからな。スカウトも、そこまで手はまわらんだろう」
梶岡は、そう言いながら、帰り支度を始めた。
梶岡は、向川と同年輩だったが、地元から東都新聞の乙羽支局に採用された男だった。啓養高の出身で桐元の先輩に当たる。だから、梶岡が知らないのだとすれば、桐元にはまだプロからの手は伸ばされていないのかもしれない。向川はそう思った。
旧幕時代の城跡は、いま、公園になっていた。紅鶴城と呼ばれたその城の名をとって、紅鶴公園と命名されている。
昔は、とうぜん、ここが乙羽の中心であったことだろう。そして、現在も、この付近が市の中心であると言ってもよいようだ。県庁、県議会議事堂、市役所、商工会議所など、行政、経済の中心的建築物が、紅鶴公園のすぐそばに集まっているのだから……。
県教育庁も、その官庁街のはずれにあった。かつて、城中にあった武徳館の一部を改装したもの

で、西側の白壁に、当時の面影が残っていた。二階建てである。
その二階のすみに、保健体育課があり、県の高等学校野球連盟はそこの部屋に同居していた。というよりも、保健体育課の次席が、県高野連の事務局長を兼ねているのだった。
中央日報の向川が、球場の帰りに、この部屋を訪ねたのは、ことによると、与倉というその事務局長から、なんらかの情報が得られるかもしれないと考えたからであった。
与倉は、四十三、四歳のはずだったが、すでに頭は完全に禿げ上がっていた。若いとき、高校野球、当時の中等野球の選手として、甲子園の土を踏んだというのが、彼の自慢であった。みずから、『県内高校野球問題の生き字引』と称している。新聞記者たちは、高校野球の予想記事や展望記事を書くとき、たいてい、与倉の意見を参考にした。
「やあ、いま球場から帰ったばかりなんですよ」
与倉は向川の姿を見ると、ぬれた手拭で顔を拭いていた手を休めて笑いかけた。「わたしとしたことが、帽子を持って行くのを忘れてね。ひどいものでしたよ。日射病になるかと思った」
しかし、与倉は口とは反対に、いかにも楽しげであった。顔を拭いていた手拭で、最後に、禿げた頭をひとなでする。
「ぼくも見てたのですがね。桐元というのはいいですね。それとも、あれは、農林高が打てなすぎたのだろうか？」
「いやいや、そうじゃない。桐元ぐらいの早い球は、高校生には、ちょっと打てないな。桐元が故

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton